

当協会における肺がん検診

～ 震災前後の現状と課題 ～

○ 佐藤丈晴¹⁾、室井祥江¹⁾、神尾淳子¹⁾、石田卓^{2,3)}、鈴木仁¹⁾

公益財団法人福島県保健衛生協会¹⁾、公立大学法人福島県立医科大学呼吸器内科学講座²⁾、/ 同附属病院臨床腫瘍センター³⁾

【はじめに】東日本大震災からの復興は未完のままにある。今回は、震災による受診率への影響を知る目的で、当協会で実施した肺がん検診の震災前後における現状と今後の取り組みについて報告する。

【対象と方法】平成18～24年度に行った肺がん検診の中で住民検診を対象とした。胸部X線検査と喀痰細胞診について年次別実施数の推移を検索し、震災前後における要

精検率、精検受診率および肺がん発見率について調査した。

【結果】 検診実施数は胸部 X 線検査の場合、18年度は 182,233 件であったが、その後、年々減少し、22年度には 135,245 件であった。23年度は 114,817 件と前年よりさらに 20,428 件(15%) 減少していたが、24年度は前年比 5% の増加をみた。喀痰細胞診は、18年度が 6,869 件で 22年度は 5,487 件まで減少し、23年度は 4,398 件と前年よりさらに 1,089 件(20%) 減少していた。地区別にみても、県北 14%、会津 7%、相双 35% と各々減少していたが、24年度は全体で前年比 3% の増加をみた。

要精検率(判定 D+E)は胸部 X 線検査においては、震災前の 5 年間は 3.63%、震災後の 2 年間もほぼ同じ 3.79% であった。喀痰細胞診では、震災前 0.23%、震災後 0.31% であった。精検受診率は、胸部 X 線検査は震災前が

85.0%、震災後は66.5%であった。喀痰細胞診も震災前91.7%が震災後82.1%へと、同様の減少傾向にあった。

がん発見率（24年度は25年5月末現在）では、胸部X線検査が震災前後ともに0.06%、一方、喀痰細胞診は震災前0.12%が震災後0.07%へと減少していた。

【考察】肺がん検診の実施数が減少した要因は、震災発生時、放射線の影響を考慮して春の検診が全県的に中止になり、秋以降に集中したことによる受診期間の短縮と考えられた。24年度は各避難地で受診できる体制を整えたため、前年より増加した。胸部X線検査の実施市町村数は、震災後に減少がなく受診者数は震災前に戻りつつある。一方、喀痰細胞診は相双地区の実施市町村数が11から9に減少し、震災前の実施数までには回復していない。精検受診率は震災後に胸部X線検査、喀痰細胞診ともに

低下しているため、25年度からは福島県医師会の協力のもと喀痰細胞診での要精検者には、個人結果通知書に「肺がん精密検査医療機関名簿」を添付している。

【まとめ】震災により減少した肺がん検診受診者数を前の状態にまで戻すことが重要であり、今後も市町村、各郡市地区医師会等との連携をさらに強めて行きたい。